



Title	ソース・モニタリング低下の恐怖をどう乗り越えるか：金城論文へのコメント
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	心理学評論, 52(3), 307-310
Issue Date	2009
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44800
Rights	© 心理学評論刊行会
Type	article
File Information	SH52-3_307-310.pdf



[Instructions for use](#)

ソース・モニタリング低下の恐怖をどう乗り越えるか

— 金城論文へのコメント —

仲 真紀子

北海道大学

1. はじめに

ソース・モニタリングができないと、情報をどこで得たのかがわからなくなる。目撃したのかメディアで見ただけなのか、自分のオリジナルのアイデアなのか先行研究で読んだだけなのか、銀行で現金を振り込んだのか振り込もうと思っただけなのか、といった区別がつきにくくなる。ソース・モニタリングの減退により冤罪が起きたり、盗作を疑われたり、銀行で何度も振込んだりということもあるかもしれない。とすれば、それはたいへん恐ろしい事態である。このような恐怖に対し、私たちは何ができるだろうか。

恐怖に立ち向かう一つの方法は、対象を分析的に検討し、冷静に対処することであるだろう (Gross, 2002)。金城論文 (2009) はまさにそれを可能にしている。金城は、まずソース・モニタリングを定義し (外的-外的ソース・モニタリング, 自己-自己リアリティ・モニタリング, 他者-自己リアリティ・モニタリング), ソース・モニタリングの失敗がどのようなかたちで生じるのかを示した (時間, 空間, 声におけるソース・モニタリングの失敗; モニタリングの難しさはソース・モニタリング, 自己-他者リアリティ・モニタリング, 自己-自己リアリティ・モニタリングの順で大きい, 等)。その上で, ソース・モニタリングの促進要因を挙げ (イメージのインフレ, 二重課題等による課題の困難性, 情報の類似度, 感情等), 神経心理学的な基盤を示している (前頭前野, 側頭葉内側部, 頭頂葉, 外側側頭部)。さらに, ソース・モニタリングの低下に関わるメカニズムについて考察し (注意, 情報のバイディング, 検索の基準の低下), ソース・モニタ

リングの減退を改善する方法 (注意を向けること, 情報を意識化し文脈とともに記銘すること, 検索の際の基準を上げること) を掲げ, 自身の研究を含む 100 もの国内外の研究を紹介し, 整理し, 高齢者の認知の特徴を明らかにしている。この論文はこれから先 10 年, 20 年のソース・モニタリング研究を方向づけることになるだろう。

本稿ではこの成果をふまえ, 方法論ならびに理論的側面について考察する。特に発達や法と心理学の領域で得られる知見と対照させながら考えてみたい。また, ソース・モニタリングの低下に伴う恐ろしい事態にどう対処すればよいかについても考察を進める。金城論文はその様態とメカニズムを分析し, 改善策を提供することで恐怖の低減に貢献した。ここでは恐怖を乗り越えるもう一つの方法, ソース・モニタリングの低下の「良い側面」を考える, ということを試みたい。

2. 方法論と理論的側面について

方法論の問題として確認したいのは, 生態学的妥当性である。高齢者研究は若年者との比較によって行われる。幼児, 児童の研究であれば, 子どもに負担のない環境で調査を行う, 易しい言葉遣いにする, 身近な材料を用いる等の工夫を行う。そうすることで幼児, 児童は以前考えられていたよりも有能であることが示されてきた。同様のことが高齢者のソース・モニタリングにも言えるのだろうか。例えば, 高齢者の活動, 物理的・情報的環境を担保することで, 若年者との差は, 多少なりとも緩和されるのだろうか。

高齢者に手がかり語を用いて自伝的記憶を想起してもらおうと, その中心的内容は自分のこと, 友人, 知人, 家族のこととなる。想起された事柄が

いつの出来事かを尋ね、20代の頃の記憶、30代の頃の記憶というように時期ごとに内容をみていくと、高齢期では自己の生活や健康が大きな割合を占め、登場する他者は10-20代では親、友人、配偶者、30-40代では子ども、50-60代では孫へと推移する(楨・仲, 2006)。こういった関心ごとを反映した課題は、生態学的に妥当な課題となるのではないか。

金城は「食品の安全性」「車の安全性」という文脈であれば、高齢者と若年者のソース・モニタリングの成績の差が小さいという研究(May et al., 2005)を紹介している。このような結果は、Mayらも示唆しているように、高齢者の動機付けの特徴、すなわち、人生の時間が十分にあるという認識のもとでは知識獲得が、人生の時間は限られているという認識のもとでは安心(感情の安定)が希求される、という主張(社会情動的選択理論)(Carstensen, Isaacowitz, & Charles, 1999)とも関わっているだろう。

生活に関しては、高齢者の生活は朝型になる。ハッシャー(2005)は、同じ課題であっても午前中に行うのと午後に行うのとでは、前者において、青年と高齢者の成績の差異が小さいという一連の研究を示している。こういった高齢者の関心、動機付け、生活上の特性を反映した課題は、生態学的に妥当な課題だといえるだろう。

そもそも、成人期までの発達過程においては、学業の達成、就職、出産、子育て、昇進等、新しい知識や技能を学ぶことが適応における大きな要件である。そこでは大量の情報を情報源ごとに保持し、使用することが重要であり、日々ソース・モニタリングの練習をしているということもできる。これに対し、高齢期では、健康、技能、財産等あらゆる側面において、すでにあるものを維持することが重要である。そのため、変化の認知(「いつもと少し違う」)、いわば親近性の認知の方がソース判断よりも適応的であるかもしれない。課題や文脈によっては高齢者も相当のソース・モニタリングができること、場合によってはソース判断よりも親近性判断の方が適応的であることが示されたならば、ソース・モニタリングの低下に関する不安はさらに緩和されるだろう。

理論的な側面に移る。金城論文は、ソース・モニタリングを「記憶、認知、推論」が関わる複雑

な過程であるとし、神経生理学的な基盤(前頭前野、側頭葉内側部等)や認知行動学的な指標(ワーキングメモリ、注意、検索方略)により、そのメカニズムに迫った。金城論文が示すように、精緻な研究が数多く行われており、ソース・モニタリング研究は将来的にこういった認知過程の要素に分解されていくのだと思われる。しかし、重要なこととして、金城は、こういった還元だけでは足りないことを示唆している。ソース・モニタリングは「記憶痕跡から直接思い出されるのではなく、思い出される際の様々な判断過程を通して評価され帰属された結果」であり、「知識、信念の起源についての帰属判断を伴う一連のプロセス」であるとし、知識、信念、推論といった側面の重要性に言及している。

ソース・モニタリングが重要な研究課題となる領域の一つに、法と心理学の領域がある。例えば、目撃証言では、想起された出来事が事件の目撃から得られたものなのか、メディア報道や事情聴取から得られたものなのかの区別が重要である。虚偽自白が疑われる事件では、被疑者が現実に行ったことなのか、暗示や誘導によって作り出した記憶なのか問題となる。金城も言及しているイメージのインフレは、誘導的な心理療法により性虐待の記憶が回復するとされる、偽りの記憶との関連で研究が進められてきた。こういった研究は、記憶の形成(リアリティ・モニタリングの失敗ともいえる)が、出来事の蓋然性に関する基準確率や信念と関わることを示唆している(Loftus, 2003; Loftus, Weingardt, & Hoffman, 1993; Naka & Maki, 2006; Van Wallendael, 1999)。例えば、鞆の色の記憶は、もっともらしい鞆の色は何かという知識による影響を受ける(Naka, Itsukushima, & Itoh, 1996)。「悪魔つきは起こり得る」と認識することは「悪魔つき」に関する偽りの記憶の形成と関連する(Mazzoni, Loftus, & Kirsh, 2001)。このような知識や信念を明らかにすることは、ソース・モニタリング研究の成果を拡張する一つの方向であるだろう。

3. ソース・モニタリングの低下がもたらすよい効果

さて、恐怖を乗り越えるもう一つの方法は、そ

のよい側面を見だし、恐れることはないと自分を納得させることである。ソース・モニタリングが低下することで、良いことはあるのだろうか。

スペキュレーションではあるが、こういうことはないのだろうか。ソース・モニタリングの発達の変化は幼児から徐々に向上し、おそらく青年期で最高潮に達し、成人期で低下しはじめ、若年高齢者、後期高齢者となるにつれさらに低下すると考えられる。幼児は高齢者と同様、ソース・モニタリングが不得手であり（近藤，2008）、さらに情報源の理解や様相（視覚，触覚等）の区別も不十分である（Naito, 2003; Nelson 2000; Perner & Ruffman, 1995）。こういった特徴は、幼児が自己を他者と分離し、理解することを困難にすると考えられる。

しかし、自己の分離、理解が十分でないからこそ、幼児は養育者と自分とを重ね合わせることができるのではないか。文脈の記憶が十分でないからこそ、（エピソード記憶は犠牲にして）意味記憶の発達が加速されるのではないか。幼児の語彙習得においては、例えば同じ形の事物であれば、同じ名称（ラベル）で呼ぶという傾向性が見られる（Markman, 1992）。こういった傾向性は、文脈やソースにこだわらず概念習得が進むことを促進するだろう。他がすべて同じであれば、ソース・モニタリングの低い子どもの方が語彙習得、外国語習得、世界に関する知識の獲得が早く進むということはないのだろうか。また、母親と自己との重ね合わせの度合いが強くないということはないのだろうか。

最近、Franklin, Barber, Yoshimura と行った研究は次のようなものであった。参加者 A, B のペアに、コンピュータ画面を見せる。そこには1つずつ、計80の単語が呈示され、参加者の課題は、A, B がそれぞれ番をとりながら、共同で物語を作るというものである。画面上に「犬」と現れれば、A は「犬が歩いていました」などと文を作る。次の単語が「森」であったとすると、B は「犬は森に入っていました」という文を作るかもしれない。このようにして80の単語を用いて物語を作成した後、提示された単語および新しい単語を加えて新旧判断を行う。さらに、旧刺激では、自分が使った単語であるか、相手が使った単語であるかのソース・モニタリングを行う。

その結果、少なくともアメリカの参加者については、対人関係尺度や共感性の高い参加者ほどソース・モニタリングの成績が低かった（Franklin et al., 2008）。つまり、相手のことを思いはかる能力が高い（と認識している）人ほど、相手が使った単語なのか、自分が使った単語なのかの混乱が多かった。なお、逆説的なことだが、日本の学生はむしろ共感性尺度の得点が低く、ソース・モニタリングはより正確という結果であった（これが何に由来しているのかは検討中である）。

高齢者ではどうだろう。ソース・モニタリングが減衰することにより、この出来事、あの出来事ではなく、「世界はこういうものだ」「人間とはこういうものだ」「自己の統合」という一般化がなされやすくなるということはないだろうか。ソース・モニタリングの低下がエリクソンのいう「統合」と関連しているとすれば、これはたいへんに興味深いことである。

今後さらにソース・モニタリングの領域横断的、発達横断的な研究が進むことを期待したい。

文 献

- Carstensen, L. L., Isaacowitz, D. M., & Charles, S. T. (1999). Taking time seriously: A theory of socioemotional selectivity. *American Psychologist*, 54, 165-181.
- Franklin, N., Barber, S., Naka, M., & Yoshimura, H. (2008). *Higher social intelligence can impair memory*. Paper presented at Psychonomic Society held at Chicago.
- Gross, J. J. (2002). Emotion regulation: Affective, cognitive, and social consequences. *Psychophysiology*, 39, 281-291.
- ハッシャー, L. (2005) なぜクローディアは学べないか 仲 真紀子(編著) 認知心理学の新しいかたち 第III部 8 誠信書房.
- 金城 光 (2009) ソース・モニタリングと加齢 心理学評論, 52, 291-306.
- 近藤 綾 (2008) 外部情報のソースモニタリング能力に関する発達の研究 発達心理学研究, 19, 46-55.
- Loftus, E. F. (2003). Make-believe memories. *American Psychologist*, 58, 867-873.
- Loftus, E. F., Weingardt, K., & Hoffman, H. (1993). Sleeping memories on trial reactions to memories that were previously repressed. *Expert Evidence*, 2, 51-59.
- 植 洋一・仲 真紀子 (2006) 高齢者の自伝的記憶にお

- けるバンプと記憶内容 心理学研究, 77, 333-341.
- Markman, E. M. (1992). Constraints on word learning: Speculations about their nature, origins, and domain specificity. In M. R. Gunnar & M. Maratsos (Eds.), *Modularity and constraints in language and cognition* (pp. 59-101). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- May, C. P., Rahhal, T., Berry, E. M., & Leighton, E. A. (2005). Aging, source memory, and emotion. *Psychology and Aging, 20*, 571-578.
- Mazzoni, G. A. L., Loftus, E. F., & Kirsch, I. (2001). Changing beliefs about implausible autobiographical events: A little plausibility goes a long way. *Journal of Experimental Psychology: Applied, 7*, 51-59.
- Naito, M. (2003). The relationship between theory of mind and episodic memory: Evidence for the development of autoegetic consciousness. *Journal of Experimental Child Psychology, 85*, 321-336.
- Naka, M., & Maki, Y. (2006). Belief and experience of memory recovery. *Applied Cognitive Psychology, 20*, 649-659.
- Naka, M., Itsukushima, Y., & Itoh, Y. (1996). Eyewitness testimony after three months: A field study on memory for an incident in everyday life. *Japanese Psychological Research, 38*, 14-24.
- Nelson, K. (2000). Memory and belief in development. In D. L. Schacter & E. Scarry (Eds.), *Memory, brain and belief* (pp. 259-289). Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Perner, J., & Ruffman, T. (1995). Episodic memory and autoegetic consciousness: Developmental evidence and a theory of childhood amnesia. *Journal of Experimental Child Psychology, 59*, 516-548.
- Van Wallendael, L. R. (1999). Training in psychology and belief in recovered memory scenarios. *North American Journal of Psychology, 1*, 165-172.

— 2009. 6. 19 受理 —